

電気通信大学 平成17年度シラバス

授業科目名	文学A		
英文授業科目名	Literature A		
開講年度	2005年度	開講年次	1、2年次
開講学期	1、3学期	開講コース・課程	昼間コース
授業の方法		単位数	2
科目区分	総合文化科目-人文・社会科学科目-		
開講学科・専攻	情報通信工学科 情報工学科 電子工学科 量子・物質工学科 知能機械工学科 システム工学科 人間コミュニケーション学科		
担当教官名	島内 景二		
居室	東1-815		

公開E-Mail	授業関連Webページ
shimauch@bunka.uec.ac.jp	

【主題および達成目標】
<p>日本の近代小説のエッセンスに触れる。 具体的には、明治を代表する文豪である夏目漱石、昭和時代の前半を代表する文豪である太宰治、昭和時代の後半を代表する文豪である三島由紀夫の三人を採り上げる。 彼らの生きた時代や家庭環境を説明することで、彼らが日本文化と自分自身の両方の面で「どういう壁」にぶち当たっていたのか、何を解決しようとしたかを考える。 ついで、彼らの残した小説を実際に読むことで、「文学」および「小説」の永遠になくならない必要性について考察する。</p>

【前もって履修しておくべき科目】
特に、なし。

【前もって履修しておくことが望ましい科目】
特に、なし。

【教科書等】
教科書：新潮文庫編『文豪ナビ・夏目漱石』（新潮文庫） 新潮文庫編『文豪ナビ・太宰治』（新潮文庫） 新潮文庫編『文豪ナビ・三島由紀夫』

【授業内容とその進め方】

最初に、夏目漱石の人と作品を考える。「近代日本」や「近代知識人」とはどういう社会でありどういう人間だったのか。漱石の憂えた日本社会と近代人の病根は、二十一世紀の今でも消滅していない。そのことを、衝撃を持って受け止めて欲しい。

次に、永遠の青春作家と言うべき太宰治の人と作品を考える。「人間失格」と自分自身に烙印を押した太宰は、どういう「人間」だったのか。そして、どういう人間になりたかったのか。

最後に、三島由紀夫の人と作品を採り上げる。わずか四十五歳で衝撃的な最期を遂げた三島は、文学者・芸術家として、日本文化の伝統をどのように理解し、どういう「日本」を切り開こうとして果たせなかったのか。

三冊の教科書を用いて要点を説明し、教科書に書いていないことを補足するので、必ず教科書を講義に持参すること。また、試験までに必ず一度は、教科書を読むこと。「三冊も教科書がある」と驚くかもしれないが、一冊一冊はハンディであり、廉価である。しかも通読に適するように、細心の配慮が施されている。

【成績評価方法及び評価基準(最低達成基準を含む)】

学期末の論述式試験を、最重視する。ただし、学期途中で小レポートを課す。これを提出していなければ、試験の成績からワンランク下げる。また、何回か出席を取る。

この講義に触発されて諸君がどのくらい小説を読んだか、この講義と自発的な読書によって諸君がどれだけ思索したか、その点を考慮して採点する。

【オフィスアワー：授業相談】

特に設けない。質問等は電子メールで受け付ける。

【学生へのメッセージ】

文豪たちの生き方は、わたしたちの「理想」であるか「反面教師」であるかの、どちらかである。漱石は永遠の憧れだろう。太宰は、好きか嫌いかがはっきりと別れる。三島も、好悪が両極端に別れよう。

好きであれ、嫌いであれ、彼らの作品を手にとった瞬間に、私たちはなぜか彼らの作中世界に一気に引きずり込まれてしまう。私たちは、作中人物と一緒に一喜一憂する。その魅力を一人でも多くの学生諸君にわかってもらいたい。

【その他】